

2022年度

# 公益財団法人 高柳健次郎財団

高柳健次郎賞・研究奨励賞・科学放送高柳賞



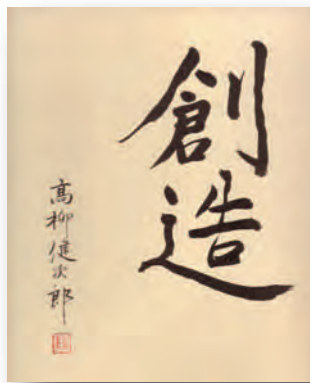
恒に夢を持つこと  
志をすてず”  
難きにつく

昭和38年1月3日

高柳健次郎



高柳健次郎 書齋にて



よい科学者、好術者である  
まことによい人間であれ  
高柳健次郎

## 設立

故高柳健次郎氏が文化勲章の授章に際して、「決して私一人の力で成しえたことではありません」と謙虚に述べ、「初期の研究過程において、研究費の不足に困ったとき助けられた有難さを今も忘れることがない」と感謝の気持ちを表している。そして、これまでに多くの方々から受けたご恩に報い、併せてわが国の電子科学技術の振興に些かなりとも貢献できればと念願し、設立されました。



## 高柳健次郎の功績 「世界で初めてブラウン管による電子表示に成功」

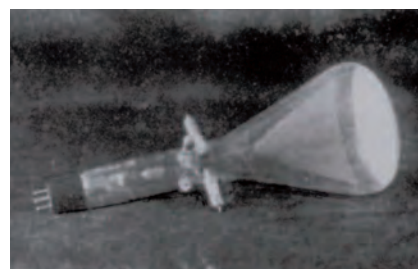
高柳健次郎博士は、電子式テレビジョンの実現を目指して研究し、1926年12月25日に世界で初めてブラウン管を用いて電子映像表示に成功した。

当時、イギリスでは、1925年にベアードが送受信ともニポーの回転円板を用る機械式テレビジョンの実験に成功、翌年には機械式テレビジョンの公開実験を行っていた。他方、米国、欧州各国などでもテレビジョンの実現に向けた様々な試みが行われていた。

高柳は、機械式では精細な画像表示ができないと判断して、映像を電子的に撮像・表示する電子式テレビジョン技術の開拓に挑戦し、浜松高等工業学校で研究を進めた。1924年12月に電子表示のために独自に開拓した熱陰極ブラウン管の試作を芝浦電気(株)(現東芝)に依頼した。撮像はニポーの円盤で画像を走査し、高速電子回路を開拓して電子映像を作った。1926年12月25日、雲母板上に書いた「イ」の字を、世界で初めてブラウン管上に電子的に表示することに成功した。時あたかも大正天皇が崩御され、その号外新聞発刊の鈴の音を聞きながらであった。こうして、世界初の電子式テレビジョン受像器を実現、それはまた、世界初の電子映像表示装置(ディスプレイ)の達成であった。高柳は1927年には真空管式の撮像管の特許出願を行うなど、その後は電子式テレビジョン放送の実現・発展に貢献した。

他方、アメリカでは、1927年、フィロ・ファンズワースが電子式テレビジョンの特許を申請し、1933年にツボルキンがアイコノスコープ(撮像管)を発明し、受像には高柳が達成したブラウン管方式が用いられて、電子式テレビジョンが開拓されていった。

現在、高柳が開拓した電子映像ディスプレイは、テレビジョンの映像表示のみならず、電子機器の発展につれて「人間と機械の対話装置」へと発展し、パソコンやスマートフォンなどの情報通信端末のキーテクノロジーに進化し、現在の情報通信技術社会の発展を支えている。



「イ」の字の表示に用いられたブラウン管

## ● 目的・事業

当法人は、電子科学技術に関する独創的な研究開発に対し研究助成を行い、また優れた研究業績者を表彰することにより、わが国の科学技術の振興に寄与し、豊かな社会の創造に貢献することを目的としています。その目的を達成するため、下記の事業を行っています。



理事長 末松安晴

### 〈 高柳健次郎賞 〉

電子科学技術に関する優れた研究により、わが国のこの分野の振興並びに産業の発展に貢献された方々の功績に報い、電子科学技術の更なる発展とその啓蒙に寄与することを目的とした賞です。

- 高柳健次郎賞 1件 表彰盾並びに記念のメダルを贈呈
- 高柳健次郎業績賞 2件 表彰盾並びに副賞として賞金を贈呈

### 〈 研究奨励賞 〉

将来の発展が期待される独創的な研究に取り組む若い研究者に助成し、わが国の電子科学技術の振興並びに産業の発展に寄与することを目的としています。

- 研究奨励賞 3名～5名 表彰盾並びに副賞として研究助成金を贈呈

### 〈 科学放送高柳賞 〉

科学技術の振興とその知識の向上に役立つ優れた科学放送番組を奨励し、番組内容の向上に寄与することを目的とした賞です。優れた科学放送番組を放送した放送局を表彰しています。

- 最優秀賞 1件 表彰盾を贈呈
- 優秀賞 2件 表彰盾を贈呈

### 〈 未来技術フォーラム 〉

電子科学技術の分野で次世代の発展に寄与する最先端の技術や話題をテーマに、年3回開催しています。但し、本年度は休止いたします。

#### 〈設立許可〉

- 1984年(昭和59年) 10月31日 内閣総理大臣・国務大臣科学技術長官より、民法第34条の規定に基づく公益法人として許可を受く。
- 2010年(平成22年) 3月29日 内閣総理大臣より、公益法人認定法第44条の規定に基づく公益財団法人として認定される。
- 2010年(平成22年) 4月 1日 公益財団法人高柳記念電子科学振興財団として法人登記。
- 2011年(平成23年) 5月19日 公益財団法人高柳記念財団へ名称変更。
- 2013年(平成25年) 6月 5日 公益財団法人高柳健次郎財団へ名称変更。

# 受賞発表

---

高柳健次郎賞

---

研究奨励賞

---

科学放送高柳賞

---

2022年度 高柳健次郎賞・研究奨励賞・科学放送高柳賞 受賞者

<p>高柳健次郎賞</p>	<p>Harashima Hiroshi 原島 博 博士 &lt;研究業績&gt; コミュニケーション工学の先駆的研究ならびに 次世代放送技術への貢献</p>
<p>高柳健次郎 業績賞</p>	<p>Takada Hideaki 高田 英明 博士 &lt;研究業績&gt; 新たな立体知覚現象に基づく 360度裸眼3D表示システムの研究開発</p>
	<p>Fujisawa Hiroshi 藤沢 寛 氏 &lt;研究業績&gt; Web 技術を利用した放送通信連携技術の研究</p>
<p>研究奨励賞</p>	<p>Oka Hiroki 岡 弘樹 博士 &lt;研究課題&gt; 超スマート社会の電子科学技術を支える 環境適合な有機電池の創製</p>
	<p>HIRSCHBERGER Maximilian 博士 &lt;研究課題&gt; 伝導性電子の量子波動的性質を利用した 新規インダクタデバイスの開発</p>
<p>科学放送高柳賞 最優秀賞</p>	<p>● 番組名 NHKスペシャル「恐竜超世界 in JAPAN」 &lt;放送局&gt; 日本放送協会</p>
<p>科学放送高柳賞 優秀賞</p>	<p>● 番組名 映像22「研究者法廷に立つ・特許の対価を問う理由」 &lt;放送局&gt; 株式会社毎日放送</p>
	<p>● 番組名 「ヨコヅナイワシー駿河湾 最深部の王者“3つの謎”-」 &lt;放送局&gt; 株式会社テレビ静岡</p>

# 高柳健次郎賞

「コミュニケーション工学の先駆的研究ならびに次世代放送技術への貢献」

原島 博 博士

東京大学

名誉教授

1945 生



## 学歴

1968年3月 東京大学工学部電子工学科卒業  
1970年3月 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了  
1973年3月 東京大学大学院博士課程修了、工学博士

## 職歴

1973年4月 東京大学工学部専任講師  
1975年4月 東京大学助教授  
1984年2月 スタンフォード大学客員研究員(文部省在外研究員)(10ヵ月)  
1991年1月 東京大学教授  
1992年4月 東京大学工学部電子情報工学科学科長(1995年3月まで)  
2000年4月 東京大学大学院情報学環教授  
2002年4月 東京大学大学院情報学環長・学際情報学府長  
2004年4月 東京大学大学院学際情報学府学際理数情報コース長  
2009年3月 東京大学退職、名誉教授  
2015年12月 東京大学特任教授

## 主な受賞歴

1973年 電子情報通信学会 米沢記念学術奨励賞	1980年 電子情報通信学会 業績賞
1989年 電気通信普及財団賞 テレコムシステム技術賞	1990年 電子情報通信学会 論文賞
1990年 電子情報通信学会 最優秀論文賞(米沢ファウンダースメダル受賞記念特別賞)	
2000年 電子情報通信学会 フェロー	2005年 日本顔学会 特別功労賞
2006年 日本バーチャルリアリティ学会 特別貢献賞	2007年 東京都技術振興功労表彰
2008年 映像情報メディア学会 論文賞 功績賞	2012年 産学官連携功労者表彰総務大臣賞
2013年 文部科学大臣表彰 科学技術賞	2015年 日本放送協会 放送文化賞
2015年 電波の日 総務大臣表彰	2016年 芸術科学会Art and Science

## 〈主な業績内容〉

原島博博士は、東京大学において、「コミュニケーションの基礎」を探ることをテーマに、信号処理、情報通信技術、空間共有コミュニケーション、知的コミュニケーションなど多岐にわたる研究を先導してきた。特にデジタル放送の基礎となる信号処理および画像の圧縮符号化技術の開発に大きく貢献するとともに、スーパーハイビジョンや立体テレビなど次世代放送技術の研究開発を指導するなど、放送文化の発展に努めた。

デジタル技術の黎明期にいち早くデジタル信号処理の研究に着手し、デジタル放送技術の基礎を築いた。大学院時代に開発した高密度データ伝送方式の研究成果は、Tomlinson-Harashima Precodingとして2006年にツイストペアケーブルのイーサネット世界標準(IEEE規格)に、無線通信の分野ではMIMO(Multiple-Input and Multiple-Output)の非線形プリコーディング手法にも用いられている。画像のデジタル圧縮符号化の研究においては、知的画像符号化を提唱し画像符号化の研究を新たな領域に導いた。これは、画像信号の波形を符号化するのではなく、画像を構造や意味に基づいてモデル化し、そのパラメータだけを符号化するもので、送信側、受信側で知識を共有しておくことで信号を再構成可能とし、大幅な圧縮が可能となる。これらの研究を背景として、旧郵政省電気通信技術審議会委員、日本放送協会における放送技術研究委員会委員、放送技術審議会委員、放送技術研究所研究顧問などを歴任した。また、電子情報通信学会論文賞、業績賞、市村学術賞功績賞、映像情報メディア学会功績賞など、多数の表彰を受けている。

3次元映像を中心とした空間コミュニケーションの研究においては、被写体の3次元的情報を光線空間として記述する手法を考案し、従来の立体テレビの枠組みを超えた3次元映像に関する基礎技術を開発するなど、従来型のディスプレイでは実現できなかったインタラクションや空間コミュニケーションを可能にするシステムを提案した。これは日本放送協会での立体テレビの研究に受け継がれ研究が進められている。また、これらの業績は、映像情報メディア学会論文賞、著述賞、産学官連携功労者表彰総務大臣賞などにより評価されている。

知的画像符号化から発展した画像の構造化においては、特に顔画像を対象として実時間表情情報抽出・認識を行う新たな技術や表情合成技術と結び付けて感性・ユーザーインタフェースへの応用を行う研究を先導した。感性的な対人コミュニケーションの基本である、人の顔・表情や身振り・手振り画像の動的な分析と合成による感性コミュニケーションモデルを構築し、知的コミュニケーション、ヒューマンコミュニケーション工学・顔学に代表される新たな学術分野を提唱した。

学会活動においても、人を中心とした情報通信技術の基盤確立に多大な貢献をした。電子情報通信学会ではソサイエティ化に尽力し基礎・境界ソサイエティ初代会長に就任するとともに、編集理事、副会長、さらにヒューマンコミュニケーショングループ創設にも寄与した。他に、映像情報メディア学会会長、IEEE情報理論グループ東京支部チェアマン、日本顔学会の創設、日本バーチャルリアリティ学会会長などを歴任した。行政機関においても、旧郵政省の放送と視聴覚機能に関する検討会の座長として、光感受性発作など映像が人に与える影響の検討を指導し、放送の安全性確保に貢献した。次世代放送技術に関する研究会では、超高精細映像、立体テレビなどの将来の放送技術に関する研究を先導した。

# 高柳健次郎業績賞

## 「新たな立体知覚現象に基づく360度裸眼3D表示システムの研究開発」

高田 英明 博士

長崎大学 情報データ科学部・教授 1972生



### 学歴

1995年3月 東海大学 開発工学部 情報通信工学科 卒業  
1997年3月 電気通信大学大学院 情報システム学研究科 博士前期課程 修了  
2007年8月 早稲田大学大学院 国際情報通信研究科 博士後期課程 修了 博士(国際情報通信学)

### 職歴

1997年 4月 日本電信電話株式会社 入出力システム研究所  
2007年11月 早稲田大学 国際情報通信研究センター 客員研究員(～2012年3月)  
2010年 4月 日本電信電話株式会社 研究企画部門 担当課長  
2014年10月 日本電信電話株式会社 メディアインテリジェンス研究所 主幹研究員  
2018年 3月 日本電信電話株式会社 サービスエボリューション研究所 主幹研究員・グループリーダー  
2020年 4月 長崎大学 情報データ科学部・大学院工学研究科 教授(～現在)  
2022年 4月 宇都宮大学 オプティクス教育研究センター 客員教授(～現在)  
2022年11月 長崎大学 学長補佐・DX推進室長(～現在)

### 主な受賞歴

2001年 7月 3次元画像コンファレンス 優秀論文賞  
2002年 3月 日本バーチャルリアリティ学会 学術奨励賞  
2003年 5月 電子情報通信学会 業績賞  
2006年 4月 文部科学大臣表彰 科学技術賞(研究部門)  
2006年 4月 アドバンスト ディスプレイ オブ ザ イヤー ディスプレイ・モジュール部門 特別賞  
2010年 7月 仙台応用情報学研究振興財団 野口賞  
2014年10月 IEEE IAS Technical Committee Prize Paper Award (Second Prize)  
2016年10月 IEEE IAS Technical Committee Prize Paper Award (Second Prize)  
2018年 6月 画像電子学会 画像電子技術賞  
2021年 6月 情報処理学会 論文誌デジタルコンテンツ 論文賞

### 〈主な業績内容〉

将来のサイバー・フィジカル社会における人と人との究極のインタフェースとして、相手があたかもそこにいるかのような超臨場感映像が期待されている。その実現に向けて重要な役割を果たす3D映像では、3Dメガネなどを必要とせずに自然な立体視ができる裸眼3D表示技術の研究が進められている。

特に、表示対象がテーブル上に実在するかのような3D表示は、SF映画などにも登場する仮想空間と現実空間との境界を意識しない次世代のコミュニケーション、スポーツフィールドを複数人で俯瞰して観戦するライブビューイング、工業製品のデザインやモデリングなど幅広い応用が期待されている。

高田英明氏は、新たな立体知覚現象の発見に基づき、前後2面の表示面の明るさの割合を制御するだけで、3Dメガネなどを必要とせずに自然な3D像を簡便な構成、かつ、少ないデータ量で提示できる新たな裸眼3D表示方式を確立し、様々な用途に向けた小型液晶ディスプレイタイプから大型プロジェクションタイプまでの裸眼3Dディスプレイの実現に成功した。

また、従来の多くの3D表示に用いられる異なる方向から見た複数の映像に着目することで、立体知覚現象のメカニズムを、複数の映像の間を補間して知覚させるメカニズムに拡張した。新たな光学系の開発と合わせて、従来、膨大な数の映像やプロジェクタなどを圧倒的に削減した、世界最大級のインタラクティブ型360度テーブルトップ裸眼3D表示システムを開発した。

最近では、画質や構造に有利な光学系の適用と小型モジュール化の提案により、個人レベルでも利用可能なシンプルかつ高画質なパーソナル裸眼3D表示システムの実現を目指すなど、視覚の知覚メカニズムを活用する多くの取り組みにより、本分野を牽引してきた。

観察者から見て奥行き方向に配置した2面の表示面に、表示したい3D像の2D射影像を重ねるように表示すると、異なる2つの像ではなく、奥行き方向に融合した1つの像として知覚する(奥行き融合現象)。表示したい3D像の奥行き位置に応じて前後2面の像の輝度比を変化させると、奥行き位置が連続的に変化して知覚する(奥行き位置の連続的知覚現象)。この2つの現象を、前後2面に積層したそれぞれの液晶パネルの光学的制御や光学スクリーン設計と合わせて実現する新たな裸眼3D表示方式を考案し、各種用途に応じた多くの裸眼3D表示装置の実現に貢献した。

立体知覚現象の奥行き融合は、眼の網膜上に映った像の水平方向のエッジ知覚に関係することから、多くの3D方式に用いられる視差を用いた視点映像に奥行き融合の概念を適用することで、中間視点相当の映像を視覚的に補間して知覚させるメカニズムへと発展させた。また、隣接した視点映像を光学的に重ね合わせつつ空中に結像する新たな光学積層スクリーンを開発し、なめらかで自然な運動視差を実現する独創的な360度全周囲裸眼3D表示技術を創出した。本技術により、従来に比べて1/5～1/10程度にまで視点数を削減し、インタラクティブな操作インタフェースを備えた裸眼3D表示システムを開発した。

このように高田氏は、利用者が人であることに着目し、人の知覚特性を最大限に活用することで、デバイスの進化だけでなく人とデバイスとの協調によって技術課題を克服する新たな取り組みにチャレンジし、また、映像関連の学会理事や研究会委員長、光産業技術のロードマップ策定委員長などを務めるなど、光産業や映像産業の発展に大きく貢献している



# 高柳健次郎業績賞

## 「Web 技術を利用した放送通信連携技術の研究」

藤沢 寛 氏

日本放送協会 放送技術研究所ネットサービス基盤研究部・上級研究員 1970生



### 学歴

1993年3月 早稲田大学理工学部電子通信学科卒業

1995年3月 早稲田大学大学院理工学研究科電気工学(通信)専攻修士課程修了

### 職歴

1995年 日本放送協会 松江放送局

1998年 日本放送協会 放送技術研究所

2007年 日本放送協会 放送技術研究所 専任研究員

2010年 日本放送協会 放送技術研究所 主任研究員

2012年 日本放送協会 メディア企画室 副部長

2014年 日本放送協会 放送技術研究所 上級研究員

2022年 日本放送協会 放送技術研究所 シニアリード

### 主な受賞歴

2001年5月 映像情報メディア学会 鈴木記念賞

### 〈主な業績内容〉

2000年以降、BS放送、地上放送がデジタル化され、高画質・高品質なコンテンツを同時に安定して多くの家庭に送り届けることが可能となった。その頃、インターネットにおいては、動画配信、SNS、eコマース、検索エンジンなど、さまざまな双方向サービスが急速に展開され、それらを支えるWebを中心とした多くの技術が生み出されていた。これらを背景に、放送と通信を連携する新しいハイブリッド型サービスを可能とする技術の実現に期待が寄せられた。この技術の目指すところは、情報やコンテンツを同時に多くの人々に届ける「放送サービス」と、個々のニーズに合わせ、次々と新しいサービスが受けられる「インターネットサービス」とを組み合わせた新しいサービスや事業の創出、およびそれらを利用するユーザーの利便性を高めることにある。

2009年、藤沢寛氏は、上記の背景を見据えて、放送通信連携技術方式「ハイブリッドキャスト」の研究に着手した。当時のデジタル放送におけるデータ放送は、放送独自のBML(Broadcast Markup Language)で記述されており、インターネットとの親和性に乏しく、放送以外でのサービスへの発展性に課題があった。そこで、Webの標準化団体であるW3C(World Wide Web Consortium)において勧告化が進められていたHTML(Hypertext Markup Language)における動画再生制御などのメディア関連機能に着目した。放送独自のBMLによる記述から、インターネットで汎用的に取り扱うことができるHTMLによる記述への転換を提案し、その標準化、および実用化に尽力した。特に、Web技術を利用したハイブリッドキャストの基本システム構成や、テレビ用Webアプリケーションモデルなどの開発に貢献した。さらに、W3Cにおいて、ハイブリッドキャストのユースケースや実装例を示し、豊かで多様なアプリケーションの提供が可能になることを国際的にもアピールした。

2012年、NHK、民放局、受信機メーカー等が参加する(一社)IPTVフォーラムにHTML5WGを立上げて主任を務め、Web技術の柔軟性を生かし放送サービスの迅速な進化を可能とする、ハイブリッドキャスト技術仕様1.0版(IPTV-FJ STD-0010,0011,0013)の策定に尽力した。

2013年、総務省「放送サービスの高度化に関する検討会」において、ユーザーが安全・安心にサービスを利用でき、オープンな開発環境の下で普及促進させるという次世代スマートテレビサービスの実現に向けた検討結果が示された。この検討結果に基づき、IPTVフォーラム推進委員会技術部門リーダーとして、サービス運用の共通化に向けた各放送局と受信機メーカーとの調整に尽力した。同年、NHKがハイブリッドキャストのサービスを開始し、2014年、在京民放局を中心にサービスが開始された。テレビ上で、ゲーム性のあるクイズ番組との連動サービス、語学サービス、ソーシャルネットワーキングサービスと連携したサービス、スマホと連携したセカンドスクリーンサービスなど、趣向を凝らしたサービスが続々と開発され、ユーザーに利用された。

2014年以降、テレビで高精細な4K/8Kを含むネット動画再生を可能とする技術や、テレビ放送とスマホアプリの連携により多様なサービスを可能にする端末連携技術の研究を主導した。W3Cで検討されていたWebブラウザ上での動画再生制御やコンテンツ保護の規格や端末連携技術など、Webの国際標準化動向を踏まえてIPTVフォーラムでの標準化を推進し、2015年、ハイブリッドキャスト技術仕様2.0版の策定に貢献した。

ハイブリッドキャスト対応テレビは、2022年6月現在、約1900万台、このうちネット動画再生が可能なテレビは約1500万台出荷された。

以上のとおり、放送サービスの進化に資する放送通信連携技術の研究と実用化、普及促進への貢献により、放送メディアの発展および放送通信産業の振興に寄与した。

# 研究奨励賞



## ● 研究課題

「超スマート社会の電子科学技術を支える環境適合な有機電池の創製」

岡 弘樹 博士

大阪大学 大学院工学研究科 テニユアトラック 助教 (工学博士)1994生

## 〈 研究概要 〉

超スマート社会に向け進化し続ける家電・スマートフォンなどの電子デバイスには、電気エネルギーの貯蔵を担う二次電池が必要であり、その需要はますます増加している。一方、二次電池には、資源枯渇の問題から、今後、高い環境適合性および再利用性が必須となる。リチウムイオン電池を例にとると、コバルトなどの枯渇資源の利用や、再利用に向け金属電極特有の複雑な分解・分離工程および高温熱処理( $>500^{\circ}\text{C}$ )などが必要であり、その研究・開発が今後さらに進展すると予想されるものの、リサイクル率は現状数%未満に留まっている。

本研究では、有機分子・高分子・構造体を対象に、これまで材料開発で注力されてきた強固な結合に基づく電荷貯蔵(充放電)という使用中の機能の向上と、それとはトレードオフの関係にある廃棄時の分解の容易性が、両立した有機レドックス材料を開発する。これらの材料を電極活物質として組み合わせることで、ウェアラブルデバイスなどの次世代の電子デバイスを支える、軽量かつリサイクル可能で、高起電力を達成しうる究極の有機二次電池の創製を目指す。



## ● 研究課題

「伝導性電子の量子波的性質を利用した新規インダクタデバイスの開発」

HIRSCHBERGER Maximilian 博士

東京大学 工学部物理工学科 准教授(博士) 1987生

## 〈 研究概要 〉

インダクタ(コイル)は電子回路を構成する最も重要な部品の一つである。通常のコイルではインダクタンスの大きさが断面積に比例するため、デバイスの小型化は困難であった。申請者と共同研究者は、最近、デバイスサイズが小さいほどインダクタンスが大きくなる、新しいタイプの創発インダクタを発見・実証した。我々は、磁性体であるスキルミオンに着目してこの研究をさらに発展させ、創発インダクタンスをもたらす新規メカニズムの発見およびその物理特性の解明を目指す。

サイバー空間とフィジカル空間が融合した調和型社会Society 5.0を実現する上で、相乗効果の高いハードウェアとソフトウェアの開発は重要な目標である。特に携帯端末や5Gを超える高周波無線通信用途に必要な電子回路では、インダクタデバイスの小型化が課題となっている。本研究では、物性物理学と材料科学の専門知識を駆使して、数100ナノメートルサイズで、かつ、大きなインダクタンスを持つ新しいタイプの電子デバイスの実現に取り組む。

## 科学放送高柳賞 最優秀賞

番組名 NHKスペシャル 「恐竜超世界 in JAPAN」

●放送局:日本放送協会

●放送日:2022年3月30日(73分間)



いま日本が、世界の恐竜研究の新たなホットスポットになりつつある。

北海道では、“恐竜界最大級の謎”とも呼ばれる謎の恐竜・テリジノサウルスの化石が見つかった。異様に長い爪を持った恐竜で、当初は恐ろしい肉食と思われていたが、そのイメージを覆す意外な姿が最新研究から見えてきた。岡山県では、映画「ジュラシックパーク」を彷彿とさせる研究が進行中だ。なんと「恐竜化石からタンパク質を取り出す」という驚きの研究の独占密着取材に成功！恐竜学の概念を変える可能性を秘めた研究を追う。

さらに「恐竜は隕石で絶滅した」という有名な定説に疑問を呈する日本の研究成果も紹介。

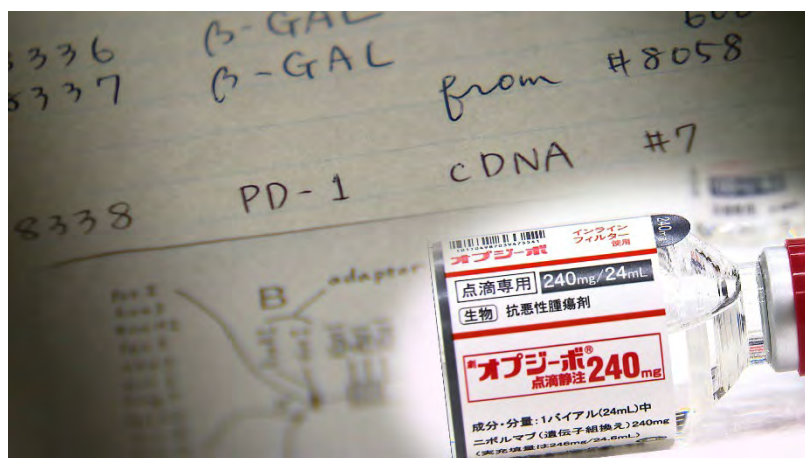
また、日本屈指の恐竜化石ハンターのガチンコ化石探しにも密着。すると九州某所で大発見の瞬間に遭遇することに！国内の様々な研究から浮かび上がった「想像を超えた日本の恐竜超世界」を最新CGで紹介、研究者たちの素顔にも肉薄する。

## 科学放送高柳賞 優秀賞

番組名 映像22 「研究者法廷に立つ・特許の対価を問う理由」

●放送局:株式会社毎日放送

●放送日:2022年1月30日(50分間)



2018年、ノーベル医学生理学賞を受賞した京都大学特別教授の本庶佑さん(80)、

受賞理由は「がんの免疫治療の発見」だった。日本の製薬会社「小野薬品」との共同研究によって開発された「オプジーボ」と呼ばれる免疫チェックポイント阻害薬は今やがん治療に欠かせない薬になった。

その元となる「PD-1」と呼ばれる分子を本庶さん率いる研究チームが約30年前に発見した。

研究者として栄華を極めた本庶さんは2020年、パートナーの小野薬品を訴える。

特許料率の配分をめぐる小野薬品から正当な対価

を支払われていないと200億円を超える賠償金を求めた。本庶さんが裁判という手段に出た理由、それは科学や基礎研究の弱体化が指摘される日本で、研究で得られた成果をアカデミアにも正当に還元したいという思いからだ。

「PD-1」発見時の貴重な記録と共に、本庶さんが次の世代の研究者たちへ託した思いと共に伝える。

# 科学放送高柳賞 優秀賞

番組名 ヨコヅナイワシ –駿河湾 最深部の王者“3つの謎”–

●放送局:株式会社テレビ静岡

●放送日:2022年1月16日(60分間)



2021年1月、駿河湾(静岡県)の最深部で新種の巨大深海魚が発見された。体長1.4m、重さ25kg。「シーラカンスが釣れた」発見した時、乗組員たちは、そんな言葉を口にしたという。その魚はセキトリイワシ科の新種で、体長が同種の一般的な個体の4倍あり、群を抜いて巨大だったため「ヨコヅナイワシ」と名づけられた。しかも、駿河湾の最深部におけるトッププレデター(頂点捕食者)、生態系の頂点に君臨する“王者”だというのだ。

テレビ静岡では2015年から独自開発の深海カメラで駿河湾の深海世界を撮影してきた。

「新種発見」の一報を受け、2021年春、ヨコヅナイワシの撮影プロジェクトをスタートさせた。

プロジェクトの中で浮かび上がったのは、これまで知られていた深海生物の“普通”とは異なる「3つの謎」。

番組では、膨大な駿河湾の深海映像、捕獲個体の解剖調査、最新研究の取材から、新種の巨大深海魚の神秘に満ちた生態に迫っている。

放送期間/2021年9月1日~2022年8月31日 ■ 応募放送局/12局 ■ 応募番組数/15番組

## 入賞番組の一般公開

本年度の入賞番組は、制作局の了解の上、公益財団法人放送番組センターが運営する、放送番組専門の公開施設「放送ライブラリー」において、後日、一般に無料で公開することにしております。

### ◆放送番組専門の公開施設「放送ライブラリー」のご案内

- 場所 横浜情報文化センター 8F  
神奈川県横浜市中区日本大通11 TEL.045-222-2828  
(交通アクセス) みなとみらい線「日本大通り駅」3番出口(情報文化センター口)直結  
JR根岸線・横浜市営地下鉄「関内駅」徒歩10分
- 開館時間 10時~17時(視聴受付は、閉館30分前まで)
- 休館日 毎週月曜日(祝日・振替休日の場合は、次の平日)、年末年始

公益財団法人番組放送センターの「放送ライブラリー」は、放送法に基づく、わが国唯一の放送番組専門のアーカイブ施設でありNHKと民放のテレビ、ラジオ番組とCMを公開しています。

詳細は、ホームページ <http://www.bpcj.or.jp/> をご参照ください。

# 歴代受賞一覧

---

高柳健次郎賞

---

研究奨励賞

---

科学放送高柳賞

---

## ■ 高柳健次郎賞・受賞者一覧

年度	氏名	受賞時の所属・職名	
2021年	秋葉 重幸	株式会社 KDDI 研究所	元代表取締役所長
2020年	青山 友紀	東京大学	名誉教授
2019年	福島 邦彦	(一財)ファジイシステム研究所	特別研究員
2018年	吉野 武彦	日本放送協会	元 専務理事・技師長
2017年	須崎 渉	大阪電気通信大学	名誉教授
2016年	内田 龍男	東北大学	名誉教授
2015年	宮原 秀夫	大阪大学	元総長
2014年	大場 吉延	日本放送協会	元 理事
2013年	白井 克彦	放送大学学園	理事長
2012年	安田 浩	東京電機大学 未来科学研究科	委員長・教授
2011年	泉 武博	日本放送協会 放送技術研究所	元 所長
2010年	青木 利晴	株式会社 NTT データ	元 社長
2009年	相磯 秀夫	東京工科大学	理事・前学長
2008年	金子 尚志	日本電気株式会社	名誉顧問
2007年	長谷川 豊明	日本放送協会	元 専務理事・技師長
2006年	辻井 重男	情報セキュリティ大学院大学	学長
2005年	立川 敬二	独立行政法人 宇宙航空研究開発機構	理事長
2004年	安田 靖彦	早稲田大学 理工学部	教授
2003年	嵩 忠雄	大阪大学	名誉教授
2002年	中村 好郎	日本放送協会	元 副会長
2001年	中原 恒雄	住友電気工業株式会社	特別技術顧問
2000年	長尾 真	京都大学	総長
1999年	林 宏三	日本放送協会 放送科学基礎研究所	元 所長
1998年	熊谷 信昭	大阪大学	元総長
1997年	斎藤 成文	東京大学	名誉教授
1996年	藤尾 孝	大阪工業大学	客員教授
1995年	岩崎 俊一	東北工業大学	学長
1994年	野村 達治	日本放送協会	元 専務理事・技師長
1993年	植之原 道行	日本電気株式会社	特別顧問
1992年	岡村 總吾	東京電機大学	学長
1991年	鈴木 桂二	長岡技術科学大学	名誉教授
1990年	宇都宮 敏男	東京理科大学 理工学部	教授
1989年	大島 信太郎	国際電信電話株式会社	元 副社長
1988年	瀧 保夫	東京理科大学 基礎工学部	学部長
1987年	平山 博	早稲田大学 理工学部	教授
1986年	尾上 守夫	株式会社 リコー	専務取締役
1985年	坂井 利之	京都大学 工学部	教授
1985年	樋渡 涓二	筑波大学 電子・情報系	教授

## ■ 高柳健次郎業績賞・受賞者一覧

年度	氏名	受賞時の所属・職名	
2021年	洗井 淳 平田 晃正	日本放送協会 放送技術研究所 空間表現メディア研究部 名古屋工業大学 先端医用物理・情報工学研究センター	上級研究員 センター長
2020年	甲藤 二郎 澤田 宏	早稲田大学 理工学術院基幹理工学部情報通信学科 日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所	教授 部長
2019年	岡田 健一 舟橋 正和	東京工業大学 工学院電気電子系 出光興産株式会社 電子材料部 電子材料開発センター	教授 所長付
2018年	高村 誠之	NTTメディアインテリジェンス研究所	主幹研究員
2017年	藤田 智成 石沢 紀彦 星井 拓彦	NTTソフトウェアイノベーションセンタ 分散処理基盤プロジェクト 日立製作所 研究開発グループ テクノロジーイノベーション統括本部 日本放送協会 放送技術研究所 新機能デバイス研究部	主任研究員 部長 上級研究員
2016年	稲見 昌彦 島本 洋	東京大学 先端科学技術研究センター 日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部	教授 上級研究員
2015年	柏野 邦夫 西田 幸博	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所 日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部	上席特別研究員 上席研究員
2014年	田中 祥次 松尾 義博	日本放送協会 放送技術研究所 伝送システム研究部 日本電気株式会社 メディアインテリジェンス研究所	上級研究員 主幹研究員
2013年	松村 欣司 高橋 敏	日本放送協会 放送技術研究所 日本電信電話株式会社 メディアインテリジェンス研究所	主任研究員 主席研究員
2012年	今井 亨 山田 悦久	日本放送協会 技術局 計画部 三菱電機株式会社 情報技術総合研究所 映像情報処理技術部	副部長 主席技師長
2011年	川村 龍太郎 角尾 幸保	日本電信電話株式会社 未来ねっと研究所 日本電気株式会社 情報・メディアプロセッシング研究所	メディアイノベーション研究部長 主席研究員
2010年	岩館 祐一 長沼 次郎	日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部 NTTエレクトロニクス株式会社 デジタル映像事業本部	主任研究員 主事
2009年	藤井 哲郎 白川 千地 細川 洋潮	東京都市大学 環境情報学部 NTTスマートコネク株式会社 出光興産株式会社	教授 取締役 電子材料開発C
2008年	丸山 裕孝 江藤 剛治 中村 淳一	日本放送協会 放送技術研究所 近畿大学 理工学部 アプティナ・ジャパン株式会社	主任研究員 教授 代表取締役
2007年	川添 雄彦	日本電信電話株式会社 NTTサイバーソリューション研究所	主幹研究員
2006年	金澤 勝	日本放送協会 放送技術研究所	主任研究員
2005年	八島 由幸	日本電信電話株式会社 NTTサイバースペース研究所	主幹研究員
2004年	小池 康博	慶應義塾大学 理工学部	教授
2003年	佐々木 誠	日本放送協会 放送技術研究所	デジタルネットワーク部長
2002年	大塚 作一	株式会社NTTデータ 技術開発本部	コンテンツ管理技術グループ・部長
2001年	榎松 啓一 土井 真利忠	株式会社NTTドコモ iEド事業本部 松永真理事務所 ソニー株式会社	取締役 本部長 代表取締役 執行役員上席常務
2000年	加藤 久和 村瀬 洋	日本放送協会 技術局開発センター 日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所	チーフエンジニア メディア情報研究部 Gリーダー
1999年	松山 駿介 中村 修二	富士通日立プラズマディスプレイ株式会 日亜化学工業株式会社	専務取締役 開発部 主幹研究員
1998年	小野 定康 斎藤 敬	日本電信電話株式会社光ネットワークシステム研究所 キャノン株式会社 B製品事業本部	小野特別研究室 室長 常務取締役 本部長
1997年	篠原 紘一 村上 宏	松下電器産業株式会社 日本放送協会 放送技術研究所	AVC商品開発研究所 主担当 表示・光デバイス 部長
1996年	森寺 健一 田昌 章	株式会社東芝 オリンパス光学工業株式会社	常務取締役 取締役 第3事業部長
1995年	清水 宏紀 野村 武史	日本ビクター株式会社 TDK株式会社	取締役 ビデオ事業本部長 基礎材料研究所 部長
1994年	西脇 秀則 鷲塚 謙	三洋電機株式会社 ニューマテリアル研究所 シャープ株式会社 液晶事業本部	太陽電池研究室長 専務取締役 本部長
1993年	萩本 和男 吉田 真澄	日本電信電話株式会社 伝送システム研究所 株式会社富士通研究所 マルチメディア研究所	光通信研究部 主幹研究員 テクノロジー研究部門長付
1992年	谷岡 健吉 土屋 裕	日本放送協会 放送技術研究所 浜松ホトニクス株式会社 中央研究所	映像デバイス研究部主任研究員 所長代理
1991年	木目 健治朗 藤原 淑男	三菱電機株式会社 電子商品開発研究所 ソニー株式会社 ビジネス&プロフェッショナル開発本部	開発第3部 第4グループマネージャー 本部長
1990年	秋山 郁男 藤原 慎司	日本電気株式会社 映像開発本部 松下電器産業株式会社 情報機器研究所	第一開発部 課長 入力デバイス開発室長
1989年	江藤 良純 大島 毅	株式会社日立製作所 中央研究 工業技術院電子技術総合研究所	第5部 主管研究員 知能システム部 視覚情報研究室長
1988年	村上 仁己 廣田 昭	国際電信電話株式会社 上福岡研究所 日本ビクター株式会社	画像通信研究室長 取締役ビデオ研究所長
1987年	野村 龍男 木戸出 正継	日本放送協会 放送技術研究所 株式会社東芝 総合研究所	主任研究員 技術管理部 課長
1986年	安田 浩 熊田 純二	日本電信電話株式会社 複合通信研究所 日本放送協会 放送技術研究所	画像通信方式研究室長 ハイビジョン研究開発グループ

■財団設立からの累計受賞者(67件)71名 (1986年度～2012年度 高柳記念奨励賞)

# 研究奨励賞・受賞者一覧

年度	氏名	受賞時の所属先		年度	氏名	受賞時の所属先	
第38回 2021年	青木 俊介 山田 駿介 若生 将史	名古屋大学 未来社会創造機構 東北大学 大学院工学研究科 神戸大学大学院システム情報学研究科	特任助教 助教 准教授	第19回 2002年	六車 仁志 木村 宏	芝浦工業大学 工学部 電子工学科 岐阜大学 工学部 電気電子工学科	助教授 助教授
第37回 2020年	張 奕勤 當麻 真奈 永岡 章	東京大学 生産技術研究所 第一部 東京工業大学 工学院 電気電子系 宮崎大学 工学部 環境・エネルギー	助教 助教 助教	第18回 2001年	寺内 衛 西村 俊和 入江 聡 小林 春夫 渡邊 高志 長田 康敬 岸田 悟 岩月 正見	広島市立大学 情報科学部 情報工学科 立命館大学 理工学部 情報学科 福井大学 工学部 材料開発工学科 群馬大学 工学部 電気電子工学科	助教授 助教授 助手 助教授
第36回 2019年	島村 耕平 孫 鶴鳴 西辻 崇	筑波大学 システム情報系構造エネルギー工域 早稲田大学 理工学術院総合研究所 首都大学東京 システムデザイン学部	助教 次席研究員 助教	第17回 2000年	大森 裕 和田 修巳 山田 功	東北大学 大学院 工学研究科 琉球大学 工学部 電気電子工学科 鳥取大学 工学部 電気電子工学科 法政大学 工学部 電気電子工学科	講師 助教授 助教授 助教授
第35回 2018年	相澤 直矢 角江 崇 安田 充	九州大学稲盛フロンティア研究センター 千葉大学大学院工学研究科 関西学院大学 理工学部	准教授 助教 特命助教	第16回 1999年	横矢 直和 和田 智志 深見 正	大阪大学 大学院 工学研究科 岡山大学 工学部 応用化学工学科 山形大学 工学部 電子情報工学科	助教授 助教授 助手
第34回 2017年	藤田 桂英 平山 竜士 森本 勝大	東京農工大学 大学院工学研究科 千葉大学 大学院工学研究科 富山大学 大学印理工学研究部	准教授 特別研究員 特命助教	第15回 1998年	横矢 直和 和田 智志 深見 正	奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 東京農工大学 工学部 応用化学工学科 金沢工業大学 工学部 電気・電子系	教授 助手 助教授
第33回 2016年	片宗 優貴 金子 健太郎 松本 圭介	九州工業大学 若手研究者フロンティアアカデミー 京都大学 大学院工学研究科 愛媛大学 大学院理工学研究科	特任助教 助教 助教	第14回 1997年	笹尾 勤 鳥養 映子 浅田 雅洋	九州工業大学 情報工学部 電子情報工学科 山梨大学 工学部 電子情報工学科 東京工業大学 工学部 電気電子工学科	教授 助教授 助教授
第32回 2015年	安在 大祐 久保 亮吾 真部 雄介	名古屋工業大学大学院 工学研究科 慶應義塾大学 理工学部 電子工学科 千葉工業大学 情報科学部	助教 専任講師 准教授	第13回 1996年	宮崎 正弘 白井 肇 荒川 薫	新潟大学 工学部 情報工学科 埼玉大学 工学部 機能材料工学科 明治大学 理工学部 情報科学科	教授 助教授 助教授
第31回 2014年	榎本 光一郎 片山 昇 高村 陽太	新潟大学大学院 自然科学研究科 東京理科大学 理工学部電気電子情報工学科 東京工業大学大学院 理工学研究科	助教 助教 助教	第12回 1995年	荒川 泰彦 山本 節夫 奥村 次徳 小谷 一孔	東京大学 生産技術研究所 山口大学 工学部 機能材料工学科 東京都立大学 工学部 北陸先端科学技術大学院大学 情報科学研究科	教授 助教授 教授 助教授
第30回 2013年	安井 隆雄 周 大江 西 祐希	名古屋大学 工学研究科 早稲田大学大学院 情報生産システム研究科 金沢工業大学 光電相互変換デバイス研究開発センター	助教 助教 研究員	第11回 1994年	武藤 佳恭 林 真至 森迫 昭光 酒井 士郎	慶応義塾大学 環境情報学部 神戸大学 工学部 電気電子工学科 信州大学 工学部 徳島大学 工学部 電気電子工学科	助教授 助教授 助教授 教授
第29回 2012年	延兼 啓純 田中 一晶 木村 貴幸	北海道大学大学院 理学研究院物理学部門 大阪大学 工学研究科 日本工業大学 工学部 電気電子工学	助教 特任助教 助教	第10回 1993年	山本 真司 若林 真一 田中 國昭 平井 有三	豊橋技術科学大学 工学部知識情報工学系 広島大学 工学部 第二類 電気系 千葉大学 工学部 電気電子工学科 筑波大学 電子・情報工学系	教授 助教授 教授 教授
第28回 2011年	村岡 貴博 井上 亮文 鈴木 健仁	東北大学 多元物質科学研究所 東京工科大学 コンピュータサイエンス学部 茨城大学 工学部 電気電子工学科	助教 講師 助教	第9回 1992年	蛭原 健治 篠田 庄司 田坂 修二 松田 基一	熊本大学 工学部 電子情報工学科 中央大学 理工学部 名古屋工業大学 工学部 電気情報工学科 長岡技術科学大学 工学部 電気系	教授 教授 教授 教授
第27回 2010年	石淵 久生 山口 実晴 宮崎 大介	大阪府立大学 大学院工学研究科 工学院大学 情報通信工学科 大阪市立大学 大学院工学研究科	教授 准教授 准教授	第8回 1991年	新井 宏之 白石 和男 半谷 精一郎 渡辺 治	横浜国立大学 工学部 電子情報科学科 宇都宮大学 工学部 電気電子工学科 東京理科大学 工学部 電気工学科 東京工業大学 工学部 情報工学科	助教授 助教授 助教授 助教授
第26回 2009年	長谷川 浩海 老原 聡 野村 孝徳	名古屋大学 大学院工学研究科 大阪電気通信大学 工学部 和歌山大学 システム工学部 メカトロニクス学科	准教授 准教授 教授	第7回 1990年	伊藤 彰義 岡野 光治 橋 邦英 根本 幾	日本大学 理工学部 電子工学科 東京大学 工学部 物理工学科 京都工芸繊維大学 工学部 電子情報工学科 東京電機大学 理工学部	教授 教授 教授 助教授
第25回 2008年	水柿 義直 多田 和也 石塚 洋一	電気通信大学 電気通信学部 兵庫県立大学 大学院工学研究科 長崎大学 工学部 電気電子工学科	准教授 准教授 准教授	第6回 1989年	加藤 誠巳 小松 尚久 寅市 和男 三橋 涉	上智大学 理工学部 電気・電子工学科 早稲田大学 理工学部 電子通信学科 筑波大学 電子・情報工学系 電気通信大学 電子情報学科	教授 講師 教授 助手
第24回 2007年	谷井 孝至 白谷 正治 岡野 好伸	早稲田大学 理工学術院 基幹理工学部 九州大学 システム情報科学研究科 武蔵工業大学 知識工学部 ネットワーク工学科	准教授 教授 准教授	第5回 1988年	浅田 邦博 吉田 雄二 小柴 正則 大津 元一 美濃 導彦 白鳥 則郎 山田 実 笹瀬 巖	東京大学 工学部 電子工学科 名古屋大学 工学部 情報工学科 北海道大学 工学部 電子工学科 東京工業大学 総合理工学研究科	助教授 教授 教授 助教授
第23回 2006年	渡邊 慎也	青山学院大学 理工学部 電気電子工学科	助手	第4回 1987年	小長井 誠 西川 博昭 大西 公平	京都大学 工学部 高度情報開発実験施設 東北大学 工学部 電気通信研究所 金沢大学 工学部 電気情報工学科 慶応義塾大学 理工学部 電気電気工学科	助手 助教授 教授 助手
第22回 2005年	中川 清 磯村 雅夫	香川大学 工学部 信頼性情報システム工学科 東海大学 電子情報学部 電気電子工学科	教授 助教授	第3回 1986年	坂内 正夫 広田 修 天野 英晴	東京工業大学 工学部 電気・電子工学科 大阪大学 工学部 電子工学科 慶応義塾大学 理工学部 電気工学科	助教授 助手 専任講師
第21回 2004年	棟安 実治 鶴殿 治彦	関西大学 工学部 電子工学科 茨城大学 工学部 電気電子工学科	助教授 助教授	第2回 1985年	齋藤 省吾 神 裕之	東京大学 生産技術研究所 相模工業大学 情報工学科 慶応義塾大学 理工学部 電気工学科	助教授 助教授 助手
第20回 2003年	出口 博之 井須 尚紀	同志社大学 工学部 電子工学科 三重大学 工学部	助教授 教授	第1回 1984年	齋藤 省吾 神 裕之	九州大学 総合理工学研究科 東京大学 生産技術研究所	教授 助教授

■ 財団設立からの累計受賞者(76大学122名) / 累計助成金額 23,160万円(1984年度~2012年度 研究助成)



# ■ 科学放送高柳賞受賞番組並びに放送局

(第28回～第43回 科学放送高柳記念賞／第44回科学放送 高柳健次郎賞)

回数/年度	受賞名	番組名	放送局名
52回 2021年	最優秀賞	「NHKスペシャル 被曝の森2021 変わりゆく大地」	日本放送協会
	優秀賞	「よみがえれ神の鳥 特別編」	長野朝日放送株式会社
	優秀賞	「ネアンデルタール人は核の夢を見るか～高レベル放射性廃棄物の行方～」	北海道放送株式会社
51回 2020年	最優秀賞	「チャンネル4 カネのない宇宙人 ～閉鎖危機に揺れる野辺山観測所～」	株式会社テレビ信州
	優秀賞	「iPS細胞が心臓病患者を救う～世界初の手術 実施までの軌跡～」	日本放送協会
	優秀賞	「クマとタマ ～軽井沢・ペアドッグの取り組み～」	株式会社長野放送
50回 2019年	最優秀賞	「NHKスペシャル 寝たきりからの復活 ～密着！驚異の「再生医療」～」	日本放送協会
	優秀賞	「ハイスクールは水族館！！」	南海放送株式会社
	優秀賞	「ガリレオX 宮大工千年の技 失われ行く工匠の知恵を守れ」	株式会社BSフジ
49回 2018年	最優秀賞	「パラリンピック・ドキュメンタリーシリーズ「WHO I AM」森井大輝(日本/アルペンスキー)」	株式会社WOWOW
	優秀賞	「衝撃！未来テクノロジー 2030年世界はこう変わる」	株式会社BSテレビ東京
	優秀賞	「NHKスペシャル シリーズ古代遺跡透視 大ピラミッド発見！謎の巨大空間」	日本放送協会
48回 2017年	最優秀賞	「カムイの鳥の軌跡 ～オオジシギ2つの物語～」	北海道テレビ放送株式会社
	優秀賞	「ゴミノヒカリ～未来を照らすアルミゴミ発電～」	株式会社チューリップテレビ
	優秀賞	「村山斉の宇宙をめぐる大冒険」	日本放送協会
47回 2016年	最優秀賞	NHKスペシャル「ミラクルボディー 世界最強の人魚たち」	日本放送協会
	優秀賞	カンブリア宮殿「世界が驚いた新素材革命！人口モ糸&石から作る”魔法の紙”」	株式会社テレビ東京
	優秀賞	「野生のいのち 死の連鎖」	北海道テレビ放送株式会社
46回 2015年	最優秀賞	SBS防災特別番組「富士山鳴動すー火の山の危機と予知ー」	静岡放送株式会社
	優秀賞	「トキ 新世界を生きる」	株式会社新潟放送
	優秀賞	NHKスペシャル「腸内フローラ～解明！驚異の細菌パワー～」	日本放送協会
45回 2014年	最優秀賞	NHKスペシャル「アルツハイマー病をくい止める！」	日本放送協会
	優秀賞	テレビ東京系列「カンブリア宮殿」ノーベル賞御用達！「光の技術を極める超絶企業」	株式会社テレビ東京
	優秀賞	TOYAから明日へ！「氷の島のメッセージ」～グリーンランド温暖化の最前線から～	北海道テレビ放送株式会社
44回 2013年	高柳健次郎賞	未来世紀ジパング～”アルマ展望台”プロジェクト	株式会社テレビ東京
	奨励賞	NHKスペシャル「世界初撮影！ 深海の巨大イカ」	日本放送協会
	奨励賞	生命38億年スペシャル・最新遺伝子ミステリー「人間とは何だ・!？」	株式会社TBSテレビ
43回 2012年	高柳記念賞	NHKスペシャル「宇宙の渚」第1集・謎の閃光 スプライト	日本放送協会
	奨励賞	KBSふるさとスペシャル「未来を回せ～富山発・小水力発電の可能性～」	北日本放送株式会社
	奨励賞	「風を集めて”レンズ風車”未来への挑戦」	RKB毎日放送株式会社
42回 2011年	高柳記念賞	「クニマスは生きていた！」	株式会社毎日放送
	奨励賞	コズミック フロント ～発見！驚異の大宇宙～「迫りくる太陽の異変」	日本放送協会
	奨励賞	チャンネル4「三兄弟が挑んだ命の鼓動～国産初・植え込型補助人工心臓開発物語～」	株式会社テレビ信州
41回 2010年	高柳記念賞	「神の鳥からの警告」	富山テレビ放送株式会社
	奨励賞	NHKスペシャル「ハッブル宇宙望遠鏡 宇宙の始まりに挑む」	日本放送協会
	企画賞	「人類よ 宇宙人になれ 立花隆VS小学生」	日本放送協会
	企画賞	「ノンフィクションW」街が踊る！ビルが笑う！デジタルサイネージで変わる世界	株式会社WOWOW
40回 2009年	高柳記念賞	「クエスト～探求者たち～ 宇宙エレベーターで宇宙へ！ 青木義男教授の挑戦」	株式会社WOWOW
	奨励賞	「富山湾・あいの海」	富山テレビ放送株式会社
	奨励賞	NHKスペシャル「病の起源 第4集 読字障害～文字が生んだ病～」	日本放送協会
	企画賞	「ニッポンの恐竜はどこから来たのか」	福井放送株式会社

第39回2008年以前の受賞番組・放送局は、ホームページ(<https://takayanagi.or.jp>)科学放送高柳賞をご参照ください。  
第1回～第27回 科学放送振興協会 主催(うち、第16回～第27回 高柳記念財団 後援) / 第28回～ 高柳記念財団・高柳健次郎財団 主催

## ■役員名簿

理事	末松 安晴 (非常勤)	理事長 東京工業大学栄誉教授
	羽鳥 光俊 (非常勤)	東京大学名誉教授 国立情報学研究所名誉教授
	児玉 圭司 (非常勤)	日本放送協会 理事・技師長
	篠原 弘道 (非常勤)	日本電信電話株式会社 相談役
	榎並 和雅 (非常勤)	国立研究開発法人 情報通信研究機構 元理事
	古屋 一仁 (非常勤)	専務理事
	坂井 勝則 (非常勤)	前専務理事
	鶴田 雅彦 (常勤)	事務局長
評議員	餌取 章男 (非常勤)	科学ジャーナリスト 京都先端科学大学 総合研究所 特任教授
	吉野 武彦 (非常勤)	日本放送協会 元専務理事・技師長
	桂 靖雄 (非常勤)	パナソニック株式会社 客員・元代表取締役副社長
	寺崎 明 (非常勤)	一般財団法人 情報通信振興会 理事長
	小松 弥生 (非常勤)	独立行政法人 国立美術館東京国立近代美術館 館長
	豊中 俊榮 (非常勤)	株式会社TBSテレビ 社長室顧問
	松崎 淳嗣 (非常勤)	株式会社国際技術顧問事務所 代表取締役
	高柳 美香 (非常勤)	名古屋外国語大学 現代国際学部教授
監事	飛田 和男 (非常勤)	株式会社ネクストジェン 元常勤監査役
	森川 征治郎 (非常勤)	税理士

## ■委員名簿

### 〈 選考委員会 〉

- ・電子科学技術の分野で独創的な研究に取り組む若い研究者への研究奨励賞の選考
- ・電子科学技術の分野で優れた研究業績により、科学技術並びに産業の発展に貢献された方々の功績に対する高柳健次郎賞・同業績賞の選考

委員長	羽鳥 光俊	東京大学名誉教授 国立情報学研究所名誉教授
委員	後藤 敏	早稲田大学 名誉教授
	荒井 滋久	東京工業大学 名誉教授
	今井 亨	日本放送協会 放送技術研究所 所長
	大野 友義	日本電信電話株式会社 サービスイノベーション総合研究所 所長

### 〈 審査委員会 〉

国内の放送局でテレビ放映された優れた科学放送番組に対する科学放送高柳賞（最優秀賞・優秀賞）の審査

委員長	餌取 章男	科学ジャーナリスト 京都先端科学大学 総合研究所 客員教授
副委員長	奥野 花代子	神奈川県立生命の星・地球博物館 名誉館員
委員	青木 恒夫	元日本ビクター株式会社 コーポレートコミュニケーション部長
	榎並 和雅	独立行政法人情報通信研究機構 元理事
	穴倉 正展	産業技術総合研究所 地質調査総合センター 国内連携グループ長
	竹中 一夫	株式会社放送衛星システム 元代表取締役社長
	中西 友子	東京大学名誉教授 星薬科大学名誉教授・元学長
	並木 康臣	元日本ビクター株式会社 理事・技術本部技術戦略部長
	村垣 善浩	東京女子医科大学 先端生命医科学研究所 副所長
	元村有希子	株式会社毎日新聞社 論説副委員長
	由利 伸子	有限会社サイテック・コミュニケーションズ 代表取締役

公益財団法人 高柳健次郎財団

〒102-0082 東京都千代田区一番町4番地5 ニューライフー番町309

TEL: 03-3239-1207 FAX: 03-3262-3028

E-mail: tkinenz@oak.ocn.ne.jp

<https://takayanagi.or.jp>

**Kenjiro Takayanagi Foundation**

4-5-309, Ichiban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082 Japan

Tel: +81-3-3239-1207 Fax: +81-3-3262-3028